

知行院便り

発行／宗教法人知行院 東京都世田谷区喜多見 5-19-2 TEL 03-3417-3456 FAX 03-3417-3000



今年はお彼岸が明けても週末毎に大雨が降り、一向に暖かくなれないと思っていたら、急に夏日になったり、ゴールデンウィークには大雪の地域もあったりという春でした。こうした天候を、「異常気象」だと感じる人も多いのではないのでしょうか？

知行院の本堂には冷暖房が入っていません。皆さんにはご不便をかけておりますが、これには理由があって、小学校まで空調が完備されているような現代社会の中で、お寺くらいは四季を感じられるようにしたいと考えてのことです。住職としては、すきま風を味わうくらいの気持ちでいていただきたいと思っております。

もちろん、まったく冷暖房無しでは無理もあるので、真冬には簡易ストーブ、夏には扇風機を利用していただいております。

ただ、最近では法事でもみなさん喪服をお召になられているので、汗だくのお姿を見るたびに「いつから法事も喪服なのだろう？」と思うのです。私がお寺のお手伝いを始めた昭和四十年代には、法事に全員が喪服というケースは稀だったように思います。

調べますと、そもそも喪服は葬式で「喪に服する」遺族だけが着用していたもので、参列者は喪服を着ないのが一般的でした。ところが戦後、冠婚葬祭マナーが普及する中で、「喪に服する」という本来の意味とは異なる趣旨で、参列者も喪服を着るようになってきました。

四十九日や回忌法要も同様で、既に「喪」は終わっていますので、本来、喪服を着る必要は無いのですが、必要以上にマナーが強調され、全員が喪服を着なければいけないような雰囲気になってきました。

これはあくまでお施主さんのご意向によりませんが、住職としては年回には平服でお出かけ頂いて構わないと考えています。特に知行院の本堂は暑いので夏日は上着なしでも構いません。気軽に参り頂ければと思っております。

ごあいさつ

知行院住職 坂本観泰

住職、前任職が天台座主伝燈相承式に出席

知行院が所属する天台宗の最高位である天台座主の伝燈相承式が五月十一日、比叡山延暦寺根本中堂で厳修され、住職、前任職ともに出席をしました。

前座主の半田孝淳猥下が昨年十二月十四日、九十九歳で遷化され、新たに森川宏映探題大僧正が第二百五十七代天台座主に上任されることになり、行われたものです。

森川座主は、雅楽と声明が響く堂内で最澄の絵像前に進み、初代からの歴代座主の名前が記された相承譜に二百五十七人目の名前を記帳し、「今こそ、宗祖大師の示された『己を忘れて他を利する』という慈悲の精神が強くと求められている。人類の幸福に寄与する」と決意を述べられました。

また前座主の半田猥下は、知行院の前々住職、



天台座主に上任された森川宏映猥下

前任職、現住職と三代にわたってお世話になった方で「天台宗きつての国際派で、「世界平和を求める者同士に言葉はいらぬい」

を持論に、何度もパチカンを訪問され、ヨハネパウロ二世ローマ法王と信仰を深められました。特に笑顔の印象的な方で、檀信徒や信者、そして各国の宗教指導者の方々と笑顔で接する姿は、半田スマイルと称えられ、宗派内でも親しまれていました。

一方、新たに座主となられた森川猥下は、大正十四年生まれで九十歳、比叡山の山林保護を志して京都大学農学部を卒業し、若い時代は、一貫して、総本山延暦寺の宮繕部を中心にご活躍されました。その後、比叡山高等学校校長、延暦寺学園長、奥比叡ドライブウェイ社長などを歴任され、平成十一年からは京都山科の毘沙門堂門跡門主となりました。

また平成十九年、天皇后両陛下が延暦寺に行幸啓された時には、根本中堂で先導役を務められていました。

今回、森川座主の伝燈相承式に出席して、「天台宗千二百年の法灯を継ぐ伝統相承式は、天台宗でも限られたものしか参列できない法会であり、参列できたことは身に余る光栄です」と住職は語っています。

職員紹介

「お気軽にお声がけください」



一昨年から知行院で、法務や宮繕をして薄葉乗幸さん。品川の養願寺の出身で現在三十二歳です。

知行院に奉職することになったのは、薄葉さんが比叡山での三年籠山の修行を経験していたのがきっかけでした。坂本住職も、この三年籠山を修めています。ここまで修行を修めている僧侶は案外少なく、東京の僧侶では四人しかいません。その内の二人が坂本住職と薄葉さんであり、「そうした縁で、いつも坂本住職から気にかけていただいていた」(薄葉さん)のだそうです。

「実家のお寺もあります。あまり忙しくはないお寺なので、週に三、四日は知行院で仕事をしています。境内であつち行ったり、こつち行ったりしていますので、見かけたら、気軽に声をかけてください」とのことです。



知行院に深い縁の「石井恒良日記」展

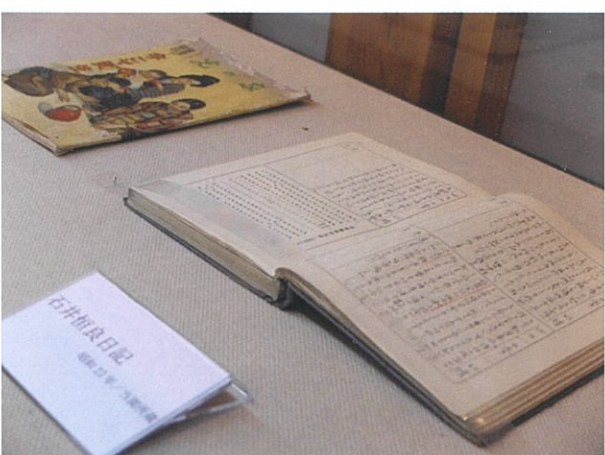
次太夫堀公園国民家園（世田谷区立）で二月二日から三月三十一日まで、収蔵資料展「石井恒良日記——書き留められた昭和の喜多見」が開催されました。

ご存じの方も多いと思いますが、石井恒良さんという人物は、現在の知行院世話人である石井良彦さんの祖父にあたり、平成二十五年十二月に亡くなった、知行院の前の総代である石井

淳良さんのお父様です。明治四十一年生まれの喜多見の文化人であり、農業の傍ら、隣組長、農協理事、氷川神社相談などを務め、村の中心的な役割を担っていました。そして、知行院の総代も務め、先々代の住職とは大親友でした。

今回は、この石井恒良さんが生涯書き続けた日記や写真などが展示されました。この日記からは、農業・養蚕・製茶など昭和初期の農業文化や、生活の中に息づく信仰文化などを知ることができました。

特に、当時の農家の暮らしが詳しく書いてあり、例えば、「雨乞い、大山の阿夫利神社えお水を頂に行つて、午後一時より農協各支部の役員が準備に出て、三時より雨乞い祈願祭執行の予



次太夫堀公園国民家園で展示された石井恒良さんの日記



のも、石井恒良さんが、毎日、細かな日記をつけていたからであり、これが次太夫堀公園国民家園に展示されたことは、郷土の誇りでもあります。

知行院の鐘を復活させます

知行院では、毎日朝六時に境内の梵鐘を打鐘してききましたが、昨年夏からしばらくの間、諸事情により、この打鐘をとりやめました。

しかし近隣の方々から、「鐘が鳴らないのは淋しい」との声をいただいております。この四月からは、時間をあらため朝七時から打鐘することといたしました。

長くご心配をかけたのですが、今後とも、鐘の音に親しんでいただければ幸いです。

新住職インタビュー 第五回 東大寺で行った千僧法要

前回、『知行院便り』では、全日本仏教青年会（以下、「全日仏青」）でご活躍をされていた時のことをお聞きしました。今回のインタビューは、その続きです。坂本住職が、理事長をされていた頃、全日仏青は、世界青年仏教徒会議など大きな行事が目白押しで、責任者として東奔西走されていました。当時の仕事やご苦労についてお聞きしました。

（聞き手 編集担当 薄井秀夫）

聞き手 奈良の東大寺での千僧法要は、全日仏青の歴史の中でも、大きな事業だったと思います。

住職 そうですね。そもそも千僧法要は、浅草で開かれた世界青年仏教徒会議日本大会のフィナーレとして行われたものです。ちょうど私が、全日仏青の理事長をしていた時、世界青年仏教徒会議の台湾大会があったのですが、その大会で、「次は日本で」という話が出て、引き受けたのがきっかけでした。

聞き手 世界青年仏教徒会議というのは、どんなことをするのですか？

住職 会議やシンポジウムなどを行い、各国の仏教徒の連携などについて話し合います。平成二十年の日本大会では、タイ、マレーシア、インドネシア、バングラデシュ、スリランカ、台湾、韓国の八カ国から参加者があり、「地域の縁 アジアの縁」というテーマで話し合いが進められました。

聞き手 その浅草での大会の最後に、なぜ、奈良で法要を行うことになったのですか？

住職 やはり、せっかく世界各国の仏教徒が集まるのですから、日本仏教にとつて象徴的な場所である奈良の地で、祈りを捧げようということになったのです。実は、千僧法要というのは、昭和六十三年から行われていたのですが、最初の年こそ千人の僧侶が参加したようですが、その後は、百人とか二百人という人数で行っていました。それをこの機会に、約二十年ぶりに千人集めて、ほんとうの意味での千僧法要にしようじゃないかということになったのです。



聞き手 私も、この千僧法要には参列しましたが、実際に圧巻でした。千人をこえる色とりどりの衣の僧侶があつまり、東大寺大仏殿に読経の音が響く光景に、感動したことを憶えています。これほどの法要は、もう二度と見ることはできないと思います。

住職 法要は、「東大寺大仏殿から世界へ」というスローガンのもと厳修されました。千人の青年僧が平和を祈ったわけですが、その祈りは



東大寺に参集した千人の僧侶

世界に伝わりと同時に、青年僧自身の心に深く刻まれたと思います。

聞き手 この日本大会や千僧法要を取り仕切ったのは、ご苦労もあつたと思います。

住職 そうですね。大変だったのは、やはり準備段階から、いろんな宗派の人たちといっしょに企画を進めてきたことです。同じ日本人でも、宗派の違うお坊さんは、案外、感覚が違ってまとまりにくいのです。そうした調整は、神経を使いましたね。

それと他の国から、たくさんのお坊さんを迎えて法要をしたわけですが、国が違うと文化が違うので、そこも大変でしたね。大会が浅草で、その後、法要が行われる奈良につれていったのですが、時間が無いのに観光をしたがったり、中には途中でいなくなつてしまふ人もいました。

あまりに大変だったので、これが終わったら、燃え尽きたようになってしまいました。

ただ、この千僧法要は、私にとつてもいい経験だったと思います。全日仏青に関わることでできて、本当によかつたと思えましたね。

定」など、農協で雨乞いの儀式をしたこと等が書かれています。

雨乞い後の日記には、「七時頃より沛然たる雨模様はその靈験の現かなるに感謝したが、忽ちにやんで了まつて失望せられた」と、雨乞いの甲斐あつて雨が降つたが、すぐにやんでしまつてがっかりした様子などが記されていたようです。

こうした当時の喜多見の生活文化を知ることできる